第 2 回アメリカ合衆国理学療法研修報告

筑波技術大学保健科学部理学療法学専攻

薄葉眞理子

要旨:2006 年 7 月 26 日 ~8 月 5 日までアメリカ合衆国アイオワ州の州立大学理学療法学養成課程、大学付属病院、開業理学療法クリニック等へ学生 3 名を引率し、アメリカにおける理学療法の臨床・教育・研究について研修を行った。渡米中、様々な研修を行うとともに、アメリカの学生との交流を積極的に図り、貴重な体験を数多く得た。

キーワード：理学療法学，アメリカ合衆国，国際交流

1. はじめに

筑波技術大学国際交流委員会では昨年度に続き 2 度目の理学療法を内容とした研修を米国で行った。昨年度は秋季休暇期間を利用して研修を行ったが、今年度は長期間の臨床実習がある 3 年生も参加できるように、7 月下旬に出発するよう計画した。しかし、厳しい臨床実習中に参加募集を行ったこともあり、3 年生の参加希望者は無かった。

昨年度の経験を踏まえ、今年度はスケジュールを詰め込まないように予定をたて、毎夕食後にその日の研修について全員で話し合い、考え方や疑問点に対するフィードバックを行う時間を設けた。

理学療法を内容とした海外研修発足の経緯、アイオワ大学、宿泊施設、shadowing について本誌第 14 巻第 1 回アメリカ合衆国理学療法研修報告で述べたのでここでは省略し、本報告では学生の感想を併せて研修内容を述べる。

2. 研修について

2.1 研修期間

2006 年 7 月 26 日～ 8 月 5 日（夏季休暇期間）

2.2 参加者

参加者 4 名の内訳は 1 年生 後藤悠希、三浦真季、2 年生 葦田梨恵、教員 薄葉眞理子である。学生の海外渡航経験に関しては、初心者 2 名、観光で行ったことがある 1 名であった。

2.3 目的

1) アイオワ大学の理学療法学科を訪問し、授業に参加する。

2) 米国における理学療法の臨床現場を視察する。

3) アイオワ大学の教職員および学生と交流する。

4) アメリカ留学について概念的に理解する。

2.4 出国前までの事前準備

出国前までに医学用語と英会話（主に自己紹介）のセミナーを学内で 4 回行った。日本の理学療法について見聞を広めるために、教員と共に病院を 1 日訪問し、理学療法の実際を見学した。また、医学用語と英会話のセミナー終了後に再度病院を訪れ、臨床現場で英語と専門用語のみを使う実践練習を教員と共に行った（半日）。

2.5 研修内容

2.5.1 実験見学

博士課程在籍中の井口正樹氏（筑波技術短期大学理学療法学科卒 2 期生 1）は脊髄損傷の筋タイプについて研究をしている。脊髄損傷を呈した披験者 2 名と実験内容について実際のデータ収集を見ながら井口氏より説明を受けた。実験プロトコールや投稿論文の書き方など、学生にとって理解が難しい内容であったが、被験者が明るい人柄で、気軽に話しかけていた。被験者の一人 Ron はその週に開催されていたアイオワ州自転車マラソンにおいて前日 160km を 7 時間走る、もう一人 Duane は釣りやキャンプが趣味

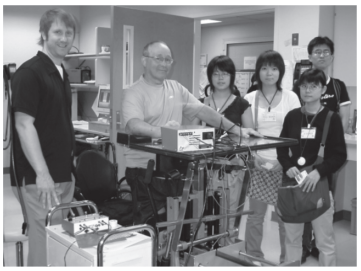

図 1　脊髄損傷を呈した患者さんに理学療法の治療を行い、筋タイプや骨の変化を追う実験の見学

図 2　実験に協力した被験者と。被験者の一人が手で漕ぐ自転車を見せてくれた（左）。

という活動的な人物であった。

図３　St.Luke's 病院の Joe Leone 氏（右端）と、訓練用の車の前で

2.5.2　一般病院見学

St.Luke's 病院（Cedar Rapid's 市）のリハビリテーション科は神経疾患、整形外科疾患、小児疾患別に診療部門が分かれており、今回は神経疾患部門を訪問した。この部門は更に外来診療（1 階）と入院診療（6 階）に分かれている。外来診療部門には「Easy Street」と呼ばれているまるで映画のセットのようにリアルな自宅や店舗のシミュレーションが出来る日常動作訓練室があり、学生達はスケールの大きさに驚いていた。入院診療部門は日本のリハビリ室に似た診療室であったが、手袋をはめながら運動療法をしている理学療法士がいたので、案内をしてくれた Leone 氏から MRSA 感染対策についても説明を受けた。

この病院見学について学生の感想を一部紹介する。

「アメリカのリハビリ科の設備の広さや器具どれにも日本との違いを感じました。日常生活の訓練をするセットがどれもカラフルで自分が患者だった場合、やる気が注がれると思います。自分は MRSA を知らず自分の未熟さを感じました。実家に帰り振り返ってみると、地元の病院で MRSA が問題になっていたことを思い出しました。これから医療人としての勉学をしていくので、しっかりと医療問題に目を通していこうと思います。」（1 年 後藤悠希）

2.5.3　開業理学療法クリニック訪問

整形疾患を主に扱っている Performance Therapeutics PC（Coralville, IowaCity 市）を訪問。変形性膝関節症の女性（70 歳）、第 3 中足骨骨折後の陸上選手（16 歳）の治療とオフシーズン中のためトレーニング目的で通院しているプロアイスホッケー選手のリハビリを見学した。

徒手療法、スポーツ選手のコンディショニング、開業の運営方法等、将来日本で理学療法士が開業する時代になった時やスポーツ傷害に携わる時に参考になるであろう。

治療の合間に訓練器の使用方法や、筋力トレーニングを体験した。このクリニック見学について学生の感想を一部紹介する。「日本には、まだこのような理学療法士個人が開業している施設が無いので、とても新鮮だった。いずれ、日本にもこのような施設ができるといいと思った。日本にない器具が、沢山あった。中には、デイブ先生が作った器具もあって、将来私も挑戦したいと思った。」（1 年　三浦真季）

図４　理学療法クリニックにてスポーツ選手のリハビリを見学

図５　凄いジャンプ力を見せてくれたアイスホッケー選手と（左）。選手がやっていた訓練を実際に学生も体験し、動作の微妙な変化により鍛えられる筋が異なる点を検討した（右）。

2.5.4　講義・演習参加

アイオワ大学は 2 学期制で、理学療法士養成課程では 2 学期の他に 2 期の夏期講習（7 月 10 日～ 7 月 21 日、7 月 24 日～ 8 月 11 日）を含むカリキュラムになっている。訪問時期は丁度 2 期目の夏期講習期間であった。夏期講習の時間割は、午前 8 時開始、午後 4 時半終了。1 回の授業時間は午前午後ともにおよそ 4 時間の集中授業であった。

この夏入学した 1 年生が受けている Health Promotion & Wellness（Nielsen 教授）と Principles of Physical Therapy（Sass 助教授）それぞれの講義と演習に参加した。Health Promotion & Wellness の講義内容は循環器リハビリテーションの応用生理学、Principles of Physical Therapy ではバリアのある住宅環境における移動方法についてであった。Health Promotion & Wellness の演習では、踏み台、自転車、

エルゴメーターの 3 方法の運動負荷試験についてグループ毎に演習を行った。Principles of Physical Therapy の演習では、構内の階段昇降やドアの開閉を車椅子や歩行器を使用して演習を行った。英語による講義は殆ど聴き取れなかった様子であったが、演習では自由に質問しながらアイオワ大学の学生達と一緒に動き回っていた。

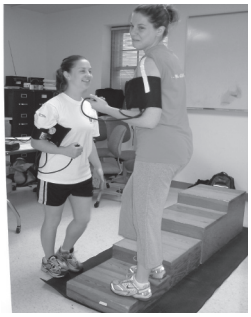

図 6　運動負荷試験演習の様子

図 7　講義室（左）と演習（右）での様子

2.5.5　アイオワ大学付属病院での Shadowing

昨年の shadowing は学生と理学療法士が 1 対 1 の形式で 1 日行ったが、今回は一人の理学療法士に学生全員と引率教員がつき、2 日間（1 日目は外来診療部、2 日目は病棟にて）行った。

Ken Leo 氏による付属病院リハビリテーション科の案内の後、1 日目の shadowing 開始。外来整形外科担当 Mike Shaffer 氏が骨折、肉離れ、五十肩等 5 症例について症例紹介、治療を見せてくれた。時折、症例と照らし合わせながら基礎解剖学の質問をして学生に聞く場面があった。Shaffer 氏の患者や学生に対するの言動がすばらしく、患者とのコミュニケーションの模範になる、と学生達は話していた。

2 日目の担当は神経疾患担当 Melanie House 氏であった。食道癌が脳に転移した四肢麻痺、頸椎損傷、脳腫瘍の 3 症例のリハビリテーションを見学し、簡単な介助を行った。

Shadowing での学生の感想を一部紹介する。「一番印象的だったのは脊髄損傷の患者さん。顔を見ているだけで患者さん自身の気持ちが伝わり、とても切なくなったがメラニー先生はそんな中明るく接していたので見習いたい。」（2 年 葦田梨恵）「患者さんを見たときにショックが大きかった。表情は、絶望的で人生に疲れたような感じがした。早くリハビリをして、少しでも快適に過ごせるようにしてあげたいと思った。メラニー先生はカルテをたくさん見せてくれた。カルテにはたくさんの情報が入っていて驚いた。」（1 年 三浦真季）

図 8　Shaffer 氏（右端）、Leo 氏（右から二人目）と

図 9　骨折のために使用していた装具（左）、学生に腫瘍の位置を説明する House 氏（右）

2.5.6　昼食会

昼食会に招待され、1 時間という短い時間であったが日米の学生が一緒に会食する機会を得た。牧場に住むアイオワ大学の学生から、次回アイオワを訪れる際、週末に食事会をする提案が出たので、快く了解した。

2.5.7　英語力について

短期間であったが日に日に上達していく様子が伺えた。初日は、和英、英和と引率教員が通訳をしなければならない場面が多かったが、徐々に聞き取りが出来るようになり、その後質問に答えられるようになり、最終的には質問することが出来るようになった。英語力に関する学生の感想を経時的に紹介する。

2 日目：「話しかけられても、上手くコミュニケーションがとれなかった。本当は話したかったけど、話せなくて残念だった。先生を通してだったけど、質問ができて良かった。」

3 日目：「簡単な質問だったが、沢山英語で質問できてよかった。」

7 日目：「専門英語が今までよりも聞き取れた気がしたので、うれしかった。」

8 日目：「英語も聞き取れて結構、理解できた。午後の授業は薄葉先生の訳がなくても、ある程度理解ができた。」

2.5.8　フィードバックについて

毎夕食後、その日に学んだことを学生に発表してもらい、フィードバックをかけた。誤った理解は英語力の不足にも原因はあるが、異なる文化や社会、そして人生感からくるものも当然多くある。その日の内に誤りを訂正し、文化や学習内容を理解することで、次の日の理解度が高まったと思われる。このフィードバックは毎晩10時、あるいは11時近くまでかかってしまったので、次年度はフィードバックの時間をなるべく日中に組むようにして、睡眠時間を十分に確保したい。

3. 研修全体について学生の感想

理学療法学専攻1年 後藤悠希

1年次に研修に行ったこともあり、自分の知識がないまま行ったので、先生や先輩の助言がなければ自分で何が何か消化できないまま終わってしまったと思います。また、英語の学習不足により、患者さんや先生方と会話がロクに出来なかったことも残念に思います。しかし、言葉の少ない英語でも話しかけることや自分で考えることの大事さを知ることが出来ました。話そうとする姿勢が大切なのだと。

理学療法学専攻1年 三浦真季

私にとって、アメリカ研修はとても充実したものとなった。楽しいことばかりではなく、辛いこともあった。しかし、今は本当にいい経験ができたと思っていると同時に、大きな達成感がある。

アメリカの病院は、ほとんどがホテルみたいで、きれいだった。そのため、患者さんがみんなリハビリに楽しく取り組んでいる気がした。また、自分が患者だったら、日本でリハビリをするよりもアメリカの方が絶対に積極的に取り組めると思う。また、日本よりもいろいろ進んでいる。

アメリカ研修や、勝田病院に行って良かったことは、PTの先生にたくさん会えて、PTとはどんなものなのかを少し知ることができたことだ。また、PTにとって大切なことは、アメリカでも日本でも患者さんのことを一番に考えることだと感じた。

もっとたくさん専門の勉強をしてからアメリカに行ったらまた、いろいろな角度からものごとを考えることができただろう。しかし、ほとんど無知な私だったからこそ得たもの、吸収できたものは多いにあったのではないかと思う。アメリカ研修に行くことができて本当に良かった。

理学療法学科2年 葦田梨恵

アメリカと日本の病院の違いや様々なことが分かり、充実した一週間を過ごせた気がします。この経験をどこかで生かせたら良いなと思います。お世話になった先生方や関係者、スタッフの皆様この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

4. おわりに

第2回アメリカ合衆国理学療法研修に学生3名が参加した。昨年度に比べるとゆとりのあるスケジュールを組み、内容を充分理解しながら進められるように、毎晩フィードバックの時間を追加した。進んだ医療の現場に接し、自分が将来なろうとする理想の理学療法士像について考える良い機会になったと思う。この体験が、今後の学生生活、そして卒後理学療法士として社会に出る将来、前向きな志を支える力となることを希望する。専門性が高い研修であるため、在学生と卒業生の合同参加について今後検討したい。2回目という事もあり、アイオワ大学の視覚障害への配慮が伺えた。また、日本からの訪問を快く受け入れている印象を受けた。姉妹校の提携を結んでいないが、多くの時間をかけて私たちを受け入れてくれたアイオワ大学の関係者に感謝したい。

謝辞

学生の渡航費の一部に対する支援が財団より実現した。財団の支援に心より感謝申し上げます。

The Second Physical Therapy field trip in the United States of America

USUBA Mariko

Course of Physical Therapy, Tsukuba University of Technology

Abstract: Three students majoring Physical Therapy and one faculty at Tsukuba University of Technology and Tsukuba College of Technology visited Physical Therapy program, Physical Therapy Department in an acute care hospital, and a Physical Therapy private clinic in State of Iowa, USA from July 26th through August 5th. Students visited classrooms, research labs, and various types of clinical settings. While learning the latest approach in the profession of Physical Therapy, the experience provided excellent stimulus to each student to become a good therapist.

KeyWords: Physical Therapy United States of America International Relations